

同窓會の思出

松村季美

今年から同窓會で發行する雜誌が貳種となり、一は學術雜誌とし他の一は會報とするのことにである。

就ては後者が始めて編輯するゝを機として同窓會生い立ちの思出の二三を記して見ようと思ふ。

自分は大正三年の暮から十二年の春迄母校養蠶部の一隅で暮した譯だから、過ぎ越し方を回想すれば霞を隔て、山を望むに似たる數々の思出が浮び來ぬでも無い。そこはかまなく次に記して見よう。

◆同窓會の誕生

我が同窓會は大正三年三月第一回の卒業生が社會に出た時と同時に生れ出でたる譯であるが、同窓會と名稱を附して具體化したのは同窓會の規則が出來て、會員の承認を得る様通知を出した翌大正四年の一月からであること云つてよからう。其時の會員は養蠶科製絲科を通じ九十餘名であつた。規則の制定は忘れもせぬ一月の初め、製絲部事務室の一隅で松井清三、清宮保の二君と小生とが卓を圍んで盛岡の高等農林學校のやつたか、その同窓會規則と小縣蠶業學校の同窓會規則とを參考として作つたものだ。其條項の簡單なること今から思へば噴飯沙汰だ。何でも六章七條に出來て居て、名稱は上田蠶絲専門學校同窓會で、組織は専門學校本科卒業生を以てし、(後間も無く本科及選科修業生も加へた。)目的は今も昔も變らず母校との連絡を計り會員相互の親睦云々、蠶絲業の改良發達云々等であつた。事務所は専門學校内に置き、事業は總會の開設、刊行物の發行、其他必要と認めたる事項であつた。役員としては只單に幹事若干名を置き、幹事は會務を處理するばかりで、當時の在校同窓生が自稱幹事の役目を務めた。

規則の改正は總會の決議を要するばかりで、其他の事は何も定めて無かつた。以上が當時一般會員に配布して意

見を求めた原案の内容を記憶する。是に就て色々意見を申來る人々も相當あつたのは勿論と云つてよからう。夫から年を追ふて幾度かの規則の改正を経て居る。殊に其中でも大正七年には支部設置に關する規則制定と共に、各地に支部の設置を企圖して彼我相互の連絡を益々密接にする様になつて來た。

終に昭和二年に於て規則の改正と共に各地支部設置の實も着々擧がり、代議員制も新たに設けられて本會が有機的に活動し得る基礎が確立した次第である。

同窓會が出来た當時の仕事は只今と比べては大層其趣を異にして居た。外部との交渉も無く只單に時々同窓生の異動や母校の状況を半紙型の一枚印刷に附して會員に配布することや、物故した同窓生の弔慰金の募集、集金、整理等であつた。第一回同窓會報は大正四年四月發行した。是天にも地にも唯一の同窓會機關雜誌誕生の年月であるのだ。始めは同窓會報告書と云ふ表紙付であつたが、第七號より告書の二字を除いて同窓會報となつた。(大正十年七月)

内容は母校に於ける諸先生の試験研究の掲載を主とし、之に同窓會の記事(會報、會計、會員移動、規則等)を附記するに云ふ型式であつた。前に記した本會規則の示す様に本會は當初設立の昔より今に至る迄全く自治的の會であるに云ふことを特徴とするのである。従つて別に會長も無ければ顧問も無かつたのである。(最も最近規則の改正に伴うて校長を名譽會長に推し母校職員に賛助員になつていただいで居るが之も時世の然らしむる所かも知れない)

同窓會報も第十一號よりは左横書と改正し、號を重ねること茲に十七に迄到達し而して本年よりは前に記した様に二種の雜誌が發行さるゝ迄に進歩した次第である。うたゝ今昔の感に堪えざるものがある。

◇ 事 務 所

同窓會事務所は初めは養蠶部では養蠶部事務室、製絲部では製絲部事務室の一隅、助手の机であつた。何も無くては不便とあつて同窓會印、印肉入、會計簿、其他切手、紙類等を入れるべき二尺に一尺五寸許の錠付の木箱を二個購入し

て一を養蠶部に一を製絲部に備へて置いた。今一つ手提金庫一個を備へて其中に僅ばかりの金を入れて恐るゝ保護したものだ。保管は會計の大金庫に依託した事もあつた。手提金庫の錠を下す時ピンと銀鈴の音がするのを珍らしがつた時代もあつたのだ。二個の木箱は夫から夫と係りの移動と共に轉々し、或は宿直室の戸棚の中（養蠶實習中は）或は事務室の本棚の上、と眼まぐるしくも移轉したものだ。今頃は懐しの木箱、思出の木箱は内に何を収めて何處に座を占めて居るこゝであらうか。所在があるやうで無い様な事務所も、同窓會事務の擴張と共に更に具體化したる場所を必要とする様になつて來た。そこで針塚校長の諒解を得て、當時製絲部繅絲婦の宿舍に充てられて居た現助手官舎を同窓會事務所に供用する事を認容して戴く事とした。（大正七年三月）そこで早速製絲部長三谷教授に交渉して、繅絲女工の轉居を迫つた。所が三谷教授の曰く『そう性急に申出したくて女工の移轉する家が見付からぬ中は無理では無いか』この事であつた。そこで種々適當な寄宿舎を探索した所が、幸に伊藤競氏の土藏造の住宅が借り受け得る運びとなつたら（デルタ商店の通り一町程北、湯屋の前の土藏造）、喜んで其旨三谷教授に御話した。

先生も非常に喜ばれてそれではと自ら其家を見に行かれたが歸つて來られて『君あの家は惜しい哉借入れる譯にはいかんよ』と云はれたから自分は『何故ですか』と御尋ねしたところが夫は吾々の世界と違つて婦人は洗濯物を干す場所が無ければならない、然るに街道に面して何等の覆ひも無い場所ではさうも其點が困ると云はれたので、始めてあゝさうかき吾々苦心家探の勞も、泡も消えてしまつたのを笑つた次第であつた。そこで今度は洗濯物を物蔭に干し得る適當な家と云ふ條件で探して、松岡さんの居られた出野氏の家を適當と認め、終に此處に教婦の玉子が移轉するこゝとなつた。春の一日、若い娘さんが、蟻が玉子を引く様なスタイルで大小の柳行李や、布圍の包を肩にして家越をした様が未だに可笑しき思出の一つになつて居る。

かくして官舎はあけられて同窓會事務所の札が門前にかけらるゝに至り、養蠶部や製絲部の在校卒業生が宿泊する事となり、現在に至つた次第である。始めて雇入れた朝比奈婆さんは樋口君が世話して下さつた人で、よく實直に働いて

呉れたが大正十二年病死した。婆さんはカミ頼つた長男が若く逝つたので、非常に落膽し、夫から云ふものは自身も健康を損ねて昔日の元氣なく遂に悲しき終を見るに至つたのは返すくも氣の毒であつた。同窓會事務所を思ふ時草分の頃まめくしく働いて呉れた此婆さんがそゞろに偲ばれてならない。事務所には夜具布圍胴衣一式を設備して不時の來客にも事缺かぬ様にし臺所道具、茶棚、本棚も設備して座敷らしき體裁も備ふるに至つた。

◇ 時 の 流 れ

ベルゲンンではないが時は流轉しつゝ創造的進化をなして居る。大海に投じた石の波紋の如く、上田を中心に四散した同窓生は今や活動の範圍次第に擴張せられ、内地は勿論、遠くは朝鮮、支那、更に西しては獨佛に、東しては太平洋の彼岸米國に迄及んで居る。數名の在校幹事の手によりて僅か百部足らず編輯せられた會報も二百さなり、三百さなり將に千部に近き迄に増加され、學術論說、報告會報内容豊富の刊行物に生れ變る迄に至つた。校内助手の机の中に座を占めた事務所（庶務、會計、雜誌編輯、事務一切を混合して取扱つた時代も過ぎて）は助手官舎に具體化し更に事務の分擔も庶務、會計、雜誌編輯其他各部分整然と分擔が定まつて、圓滑なる事務の進行を觀るに至つた。議決機關として代議員制も設けられ名譽會長、賛助員、幹事の分掌も定まり、名實共に備はつた同窓會さになつた次第である。時の流れ、時の流れ、靜かなる時の流れ、永劫盡きるこみなき時の流れこそ本會永遠の保護者であり同伴者である。